

風の末裔シリーズ・1stシーズンの5

～鎮守の森～



風の末裔の長は、そんなに暇を持って余している訳ではない。

「こう見えても結構忙しいのだ。ここ数週間所用が重なり、あの人間に預けた赤子の様子すら見に行けていない。

そんな身に、今度は妹が心配の種を持って来た。

まったく……。

馬を駆って草原を抜け、彼方に王宮を見る。そちらには向かず、王都より僅かに離れた西の森を目指す。

この森はテムジンが『鎮守の森』として近隣住民の立ち入りを禁じ、戦のない時の小狼シャオウの住処となっていた。

道なき森の中心に、木々に隠れるように小さなパオがある。

長は枝をかすめながらその前に降り立った。

パオの横に妹の馬が遊んでいる。入り口に座り込んでいた人影が、長を見て立ち上がった。

「……やあ……」

「久しぶりですね、王君。あの子は？」

長はそっけなく言った。

「中……今入ったら怒られるよ、授乳中だから」

「私は兄ですよ」

「小狼シャオウじゃない！ あの婆さんが怒るの！ 俺だっ

て閉め出されたんだ！」

「ああ……まあ、オタネお婆さんならそうでしょうね……」

「とんでもない産婆さん寄越したな！ 俺、怒鳴られっぱなしだったぞ。そのくせ、人を顎でコキ使っただ」

大切な一族の娘を連れ去り、あまつさえ身籠らせるなんて、オタネ婆さんにしたら、怒りは果てしなかったろう。

ふてくされるテムジンを見て、長はちよっぴり気の毒な気もした。

「仕方がないでしょう、人間に妖精のお産は扱えないですから。まったく、私が気を回さなかったら、あの子をどうするつもりだったんです？」

「俺が取りあげるさ」

「……!!」

長は真顔でテムジンを見た。そんな子供じみた意地で妹を危険に晒されては堪らない。

「あ、バカにしている！ 俺の下の妹二人は、俺が取りあげたんだぞー！」

「ああ……」

そうだった。この王は、泥水をすする少年時代を送ったんだ。

「あの子どもそれで良かったのなら、貴方に文句は言いません。でも、私の心配も分かって下さいね」

「ああ、…悪かったよ…」

テムジンは素直に折れた。

一族に頼りたくないのは、妹の希望だったんだろう。テムジンにしたなら、やはり心配だったに違いない。

パオの入り口の御簾が開いて、わら半紙を丸めたようなお婆さんが出て来た。

「おお…長様……」

「オタネさん、御苦労でした、感謝します。しかし、今朝方の鷹の手紙。何やら緊急を要するとのこと。どうしたんですっ」

しかしオタネ婆さんは、長の手首を両手で掴み、そのまま膝まついて涙をびわっとこぼした。

「長様…申し訳ありません…申し訳ありません…。私わたくし(が)が付いていながら……」

「あ、あの子に、何か?!!」

「心配しなくてもいいよ、その婆さん、ずうっとその調子なんだ。大袈裟なんだから」

テムジンが頭の後ろで手を組んで、どさくさに紛れてパオの

中を覗こうとしている。

「黙れ! 小悪童(こわっぱ)!! 己れなどに大切なお嬢を…お嬢を…!!」

テムジンがオタネ婆さんの振り回す杖を避けて逃げ回っている間に、長はパオの入り口に近付いた。

「兄様…? 兄様、いらしているの…?」

元気そうな声だ。長は御簾の隙間を細く開けて中に入った。

「…加減はどうですか?」

薄暗がりの中、寝床に身体を起こして、蒼い髪を長く編んで垂らした、久しぶりの妹がいた。腕の中に、真っ白い絹に包まれた、生まれたての赤子を抱いている。

「感謝します。オタネお婆さんを寄越してくださって。怒鳴り声も、懐かしかったわ」

十数年ぶりに会った妹に、いきなり懐妊の報告をされ、卒倒しそうになったのは数カ月前。しかし今、こうして無事、新しい命の誕生を眼前にしたら、素直に祝う気持ちになる。

「元気な男の子よ」

「抱かせて下さい。この子に祝福を」

小狼は兄に小さな赤子を差し出した。

その時、入り口にテムジンが現れた。杖の先っぽを挿んで高



く挙げ、シタバタするオタネ婆さんごとぶら下げている。

「落っこつすんじゃないぞ!!」

まさか、王のような粗忽者じゃあるまいし…と、赤子を受け取り、幼い顔を覗き見た…とたん…!!

驚きの余り身体中に電気が走り、腕が硬直した。取り落としそうになった赤子を、予測していたように小狼が受け止める。

「心配すんなって、俺もいっちゃん初め、落っこつしそうになった!」

テムジンがオタネ婆さんを引きずったまま、長の横に回り込んで覗き込んだ。

「心配するなって! 心配するなって…! 心配じゃ、ないんですかあゝゝ?!!」

長がテムジンの胸ぐらを掴んだ。小狼が困ったように赤子の耳を塞ぐ。

確かにテムジンの髪は赤毛っぽいけど、赤子は、それどころじゃない。血のように真っ赤な髪をして、生まれた翌日というのにはっちり開いた眼は、薄い銀色にランランと輝いていた。

赤子の背中には、首筋から繋がって真っ赤なたてがみまであるという。

「それって…それって、まるで……」

茫然と立ち尽くす長に、掴まれていた胸ぐらを外してテムジンは真顔で言った。

「俺の子だよ!!」

「いや、だって……」

「テムジンの子なの」

小狼も兄を真っ直ぐに見て言う。

「あ………」

長はチラリとオタネ婆さんを見た。婆さんは心得た顔をし、長に一礼して、テムジンを睨み付けてから外へ出た。

「いいですか。貴方達の気持ちはね、…分かりました！ よくよく、分かります。しかし現実的な問題として、我々は混血児の扱いは、慎重にせねばならないのです。その子にどちらの資質が出るか分からないし、それを考慮して育ててやらねばならない。そう言った意味で、受け継いだ血をはっきりさせておく事は……」

「ね、テムジン、もう歯が生えて来たのよ、ほら」

「ホント？ わあ犬歯じゃん!! かつけえ——!!」

のどかに赤子を覗き込んでいるテムジンをバオの隅に引きずって行き、青筋立てた長が詰め寄った。

「貴方ね、貴方！ 能天気過ぎやしませんか？ 男として…その…妻の生んだ子供が明らかに……あ………」

「うわっ、うれしいなあ！ 俺、そんなぶっちゃけトークしてみたかったんだ!! 『お兄さん』と!!」

長はテムジンを突き飛ばして、バオの壁に張り付いて荒く息を吐いた。

しばしの沈黙の後、小狼が静かに切り出した。

「ワタシも戸惑ったの…。でも本当に『そんな覚え』ないのよ……兄様……」

テムジンも襟元を直しながら長に向きなおった。

「小狼がそう言うんならそうなんだ。だって、彼女がその事について、嘘を言う必要ないんだ。もし方が…万が一だよ、あいつの子供だとしたら、俺、本当に大切にするもん!」

「………」

「ね、兄様、もう一度この子をよく見て……」

長は少し落ち着きを取り戻して、赤子に近付いた。

「このケシケシ眉毛とか、ちゅっと上をむくれた口の端っことか、テムジンにそっくりじゃないっ」

言われてみると、そこかもしれない。ランラン輝く眼だって、よく見ると、怯える仔犬のようにあどけない。

「兄様なら分かるかも……と思ったの。これってどういう事なのか？ オタネお婆さんに頼んで鷹を送りせたのはワタシなの」

「ああ……」

長は今度こそ冷静になって、子供を覗き込んだ。眉間の奥に……深い所に入り込む……。

テムジンも長の隣に来て、大人しく待った。

少しの時間の後、長は顔を上げて息を付いた。

「何か分かった？」

「……呪い……」

「呪い？!!」

小狼がこわばった。

「あの獣は、大陸から戻る少し前に、ふいといなくなったと言いましたね」

「ああ、小狼が身籠る前だよ」

「去る際に、この子に呪いを掛けて行っただんです。この子から次に生まれる子供は、生まれながらに狼が憑いているように。」

そういった所でしょっ

「……あいつがっ」

「あの、兄様……それで、この子に何か、災いが起こるのでしょっか？ 呪いの……っ」

「直接悪い事が起こると言う事はないでしょうが……でもこの容姿その物が、災いと言えば災い……」

「見た目だけかよお!!」

テムジンが両手を組んで上に突き出した。

「ついでだから、あいつの強さと凶太さも、乗っけてくれればよかったのに!!」

小狼がほおと息を吐いて赤子を見つめ、微笑みながら呟いた。

「イタスラ……なんだわ……」

「えっ」

長とテムジンが、同時に小狼を見る。

「自分がいなくなっても覚えていて欲しいっていう……ホント、子供じみた、タチの悪い……イタスラ……」

また授乳の時間だと、男二人はバオの外に追い出された。男

二人って、ホント、手持ち無沙汰だ。

「長……ありがとね。やっぱり真相が分かった方がすっきりする。」

俺は小狼を信じていたけれど」

「……あの子は絶対貴方に嘘はつかないとっ」

長は意味ありげな聞き方をした。

「うん、つかないよ。『隠し事』はあるかもしれないけれど」

テムジンは、何処とは無しの宙を眺めながら答えた。

「……『隠し事』…について、貴方は聞いただしたりはしないのじゃか。」

「うん、うなご」

「どっこいせ」

「可哀想じゃん。…嘘、つかせるの……」

数カ月前、兄の元を訪れた妹が、一番にした事は、アル・カ
ンシラの墓参りだった。

そして兄に彼女の子供の父親を打ち明け、赤子の先行きの守
護を、改めて懇願したのだった。元より長は、あの子供の事は
引き受けるつもりでいた。

妹は、テムジンからアル・カンシラを奪った責を 自分に科
しているのかもしれない。懐妊を聞いた時、彼女の身代わりにな
るつもりなのか？ と案じたが、見た限り幸せそうなので、
安心した。

「長、生まれた子は人間だった!!」

テムジンの一言で長は我に返った。

「ああ、見た目はアレですが…人間ですね」

「俺の勝ち!!」

「……………」

懐妊を聞いてから、蒼の長は一度、妹を通さずにテムジンに
会った。混血児の扱いについて知っておいて欲しかったからだ。

「どっちだって俺の子じゃん!!」

「蒼の妖精なら蒼の里で教育せねばなりません。ましてや長の
直系の血筋です。それは曲げられません!」

あの時は物別れに終わったが、結局テムジンの遺伝子が勝利
し、長も心の何処(どこ)かでほっとした。

「一応、王の子供だからさ、名目上の人間の母親が要るって言
ったじゃん」

「ああ、話は付いたのですか?」

「ヴォルテに頼む事にした」

「ヴォルテって…!! それは、無理があるでしょう!!」

ヴォルテはテムジンの正妃だ。既に三人の皇太子がいる。

「ヴォルテが一番信頼できるからさ。伊達に長年俺の正妃をや
ってんじゃない。小狼の希望は、この子を世継ぎの位置には立
たせない事なんだ。だったらこの位置の方が、融通が利く。既
にヴォルテとは、はっきり約束してある。俺が死んだ後、国も

財も三人の世継ぎで山分けすのやいいって」「

「……………」

「そのかわり、領土を一つだけ、この四男坊にやっつけてねって」「

「一つだけ?」

「北の草原の台地!」

「……………!!」

「蒼の里のある所。俺と小狼が出逢った土地!!」

蒼の長は顔を上げて、王を見つめた。テムジンはにっと笑って、また視線を宙に戻した。

「いいだろ…それで……………」

まったく…飄々としたこの男に、自分は何度心を持って行かれる事か……………」

「初めて逢った時もそうでしたねえ」

「え? な?」

「いえ、…それでは、あの子に祝福を授けて帰るとしてまじよつ」

長は草を払って立ち上がった。

「あの婆さんも連れて帰ってよ!」

「ひあてね……………」

赤子はその容姿に苦勞するかもしれない。

しかし、この父親が着いていれば限りなく安心な気がして、蒼の長はほっと息を付くのだった。

くおしまい